

## 中島敦の芸術至上主義

著者	閻 瑜
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	8
ページ	85-104
発行年	2010-08-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022626">http://doi.org/10.15002/00022626</a>

# 中島敦の芸術至上主義

閻 瑜

## 1 「芸術的抵抗」について

中島敦（1909～1942）の日中戦争開戦（1937年）から世を去った時までの作品は、「悟浄歎異」（1939年1月頃脱稿）、「山月記」（『文学界』1942年2月号）、「悟浄出世」（1942年5月脱稿）、「名人伝」（『文庫』1942年12月号）、「弟子」（1942年6月脱稿、『中央公論』1943年2月号）、「李陵」（1942年12月脱稿、『文学界』1943年7月号）など中国古典を素材にした、戦争と無縁なものばかりである。したがって、中島の戦時下における姿勢については、よく「芸術的抵抗」と関連して考えられてきている。

「芸術的抵抗」という語は、「もともと第2次大戦中に占領にあったフランスをはじめとする西ヨーロッパのレジスタンス（Resistance。抵抗運動。特に第2次大戦中にドイツに占領されたフランスの抵抗運動をさす）の文学からでた言葉で、抵抗や亡命、権力への闘争の中から発生したものである。そのため、これを日本の戦争下の文学にあてはめて整理することについては疑義がないわけではない」<sup>①</sup>ともされる。

第2次世界大戦中、フランスにおける「抵抗」と「抵抗の文学」についての全体像を、はじめて客観的に、文学的に明らかにしたのは、加藤周一氏の『抵抗の文学』（岩波書店、1951年3月）である。それによると、「抵抗」は第2次大戦の間、フランスにおける解放運動を指し、「抵抗の文学」は抵抗という国民的運動とその体験との中から生まれた新しい文学である。

戦時下、中島敦のような戦争文学を書かないでいた作家の姿勢について、「芸術的抵抗」を貫いたという観点もあるし、「芸術的抵抗」そのものの存在を

疑う意見もある。それらを整理してみると、中島文学に対し、「芸術的抵抗」主張論と「芸術的抵抗」否認論という正反対の意見があるが、それ以外、中島敦が「純粋に芸術を守った」という見方もある。

### ①「芸術的抵抗」主張論

平野謙氏<sup>(2)</sup>は戦時下の日本文学界について次のように論じている。

昭和十年代の歴史は、これを一口にいえば、戦争とファシズムの時代であり、無条件降伏という未曾有の国家的破壊にいたる荒廃と顛落との時代である。文学もまたそのような戦時体制下の統制に屈伏して、一種の非文学的時代を現前せざるを得なかった。勿論、そこに摩擦と抵抗がなかったわけではない。(略)抵抗の中心となるべき主体に欠けていた。(略)かえって沈黙という韜晦が最高の芸術的抵抗にほかならなかったのである。(略)純潔な文学的抵抗は、堀辰雄の「菜穂子」や石川淳の「曾呂利咄」や中島敦の「光と風と夢」、「李陵」など、ほとんど人目をひかぬ地点でまもられ、うけつがれていたともいえるのである。

鷺只雄氏<sup>(3)</sup>は次のように指摘している。

戦争に協力せず「芸術的抵抗」をした文学者もあった。(略)「抵抗」とはあくまでも戦争に非協力、あるいはそれを無視するかたちでの抵抗であって、その批判精神ゆえに時流に流されず、可能な限り自己に誠実に創作した文学者たちの仕事をさして言っている。

芸術的抵抗を示した文学者たちは決して多いとは言えないが、ここでは詩人としては小熊秀雄と金子光晴、作家としては中島敦と太宰治を代表としてとりあげることにする。

それ以外、小田切秀雄氏<sup>(4)</sup>と渡辺芳紀氏<sup>(5)</sup>も、戦時下において、中島敦は独自の作品世界を守り、抵抗の姿勢を示していたと指摘している。

以上のように、「芸術的抵抗」を認める論説によると、「芸術的抵抗」とは私

小説・風俗小説・歴史小説を創作し、戦争に協力しないことである。中島敦の戦時下の文学は「純粹な文学的抵抗」であり、その漢文読み下しの文体によって、独自の世界を守り、ささやかながらの抵抗をし、戦争に協力しないことをしていたのである。これに対し、「芸術的抵抗」の否認論もある。

## ②「芸術的抵抗」否認論

佐古純一郎氏<sup>(6)</sup>は次のように述べている。

それらの作家たちが、戦争という状況の下で外部から自己を遮断し、その芸術の純粹性を守ったということに、どこまで抵抗感がかけられていたかどうかは疑問である。「戦争中本と寝るのも抵抗であった」というようないいかたには私はそれほど深い意味を汲みとることはできないように思われる。(略)

私たちの戦争下に抵抗の文学がどこにも見出されなかったという結論を下してもけっして拡張ではないように思われる。

しかし私は、たとえば堀辰雄の「菜穂子」や中島敦の貴重な諸作品をはじめ、いわゆる芸術派と呼ばれる人々の戦争中の創作活動の価値を無視しようとするわけではない。(略)戦争下だからといってことさらに抵抗というわくのなかで意味づける必要はないと考えたいのである。

ほかに、三好行雄氏、竹盛天雄氏によると、『抵抗派』という言い方はむしろんとして、『芸術派』という言い方も、極めてあいまいなものといわなければならない<sup>(7)</sup>ということになる。

以上は「芸術的抵抗」を否認する観点である。つまり、芸術的抵抗は見出せないこと、あるいは、戦時下だから抵抗というわくのなかで意味づける必要はないこと、また「抵抗派」・「芸術派」という言い方は極めてあいまいなものということである。

上記の「芸術的抵抗」主張論と「芸術的抵抗」否認論のほかに、中島敦が「比較的純粹に芸術を守った」<sup>(8)</sup>という吉田精一氏の見解もある。

上に見るように、「芸術的抵抗」は存在したか否かについては定説がなく、

その定義も曖昧なものである。また、中島敦の戦時下の姿勢を「芸術的抵抗」と位置付ける場合、その内実は定かではない。こういう研究状況の中、まさに鳥居邦朗氏が指摘しているように、「文学的抵抗の問題を少しでも有効に論じようとするならば、一人ひとりの作家、一つひとつの作品について、ていねいに検証しなければならないだろう。その作家の経歴・資料及び時代との関係において、詳しく見ていく必要がある」<sup>(9)</sup>のである。次は改めて中島敦の残した作品、書簡、メモおよび彼に関する回想にもう一度錘鉛を降ろして、戦時下の中島の姿勢を探ってみたい。

## 2 エッセイ「章魚木の下で」

「章魚木の下で」は、中島敦の数少ないエッセイのうち、最後のものである。木村一信氏によると、このエッセイは、同人雑誌『新創作』の編集責任者の船山馨氏に、「ガサツな戦意昂揚小説や志の卑しい便乗小説ばかりが氾濫するなかで、中島氏は希有な存在であり、その作品は気品と格調に於て一頭地を抜いていると深く敬服していましたので、是非新年号を飾って頂こうと思った次第」<sup>(10)</sup>であると、依頼されたため、中島が1942年11月ごろ、喘息に苦しみながら書いたものである。彼の没後、1943年1月『新創作』<sup>(11)</sup>新年号に「遺稿」として発表された。

この二千字少々の記事は、彼が1942年7月ごろ南洋庁<sup>(12)</sup>から帰京後、当時の日本文壇の著しい変化への感想を書き記したものである。「章魚木の下で」は次のように始まる。

数ヶ月してから東京へ出て来た。気候ばかりでなく、周囲の空気が一度に違つたので、大いに面喰つた。本屋の店頭に堆く積まれた書物共を見て私は実際仰天した。

中島が南洋庁教科書編集書記として南洋庁に赴任したのは、1941年6月から1942年3月までで、その間に、日中戦争への突入によって、軍部が政治に進出し、軍国主義体制が急速に強化されてきた。文化統制の名のもとに文学を戦争

遂行の手段として利用しようとする権力側の動きに対して、当初文学者側はその空しさを見ぬき、批判的な態度を取っていたが、1938年にはじまる文学者の従軍とそれに伴う戦争文学の流行や国策文学の氾濫、文芸銃後運動が推進されるなかで渦中に巻きこまれてゆき、遂に1941年12月8日に太平洋戦争が勃発するに及んで殆どの文学者が一致団結して協力するに至ったのである。中島は、彼の南洋庁に赴任していた時期がちょうど太平洋戦争勃発を挟んだ一年近くの間であったため、南洋から帰った後、日本文学界、政治、社会の変動の激しさに大いに驚いたのである。

「章魚木の下で」には、「文学」と「戦争」の関係について語る一節がある。

戦争は戦争。文学は文学。全然別のもと思ひ込んでゐたのだ。(略)

書くものの中に時局的色彩を盛らうと考へたこともなく、まして、文学などといふものが国家的目的に役立つせられ得るものとは考へもしなかつた。少なくとも応用科学が戦争に役立つと同じ意味で文学が戦争に役立つ得るとは愚かにも思ひ及ばなかつたので、此の際文学は忘れ去って唯当面の仕事を一心にやってみればいいのだと簡単に考へた。

「戦争」と「文学」は全く違うもので、「文学」が「戦争」に役立つものではない、という中島の文学観がうかがわれる。また、次の一節もある。

自己の作物に時局性の薄いことを憂へて取つて付けた様な国策的色彩を施すのも少々可笑しい。感動はあつても未だ文学的なものに迄醜酔しないし、古い題材では矢張何かしつくりせず、其の他種々の事情から現在が書きにくい時期だといふことは判る。だから、書けなければ書けないで、何も無理をして書かなくともいいのではないか。(略) 却つて文学を高い所に置いてゐるが故に、此の世界に於ける代用品の存在を許したくないだけのことである。食料や衣服と違つて代用品はいらない。出来なければ出来ないで、ほんものの出来る迄待つほかは無いと思ふ。だから、つい斯んなものの言ひ方になるのである。

章魚木の島で暮らしてゐた時戦争と文学とを可笑しい程截然と区別して

ゐたのは、「自分が何か実際の役に立ちたい願ひ」と、「文学をポスター的  
 実用に供したくない気持」とが頑固に素朴に対立してゐたからであつた。  
 (傍点、原文。以下同)

ここから、戦時下において、功利的に文学作品に国策的色彩を施し、時代便乗  
 的な人びとへの批判が見出せる。「文学を高い所に置いてゐる」ために、その  
 「代用品の存在を許したくな」く、「出来なければ出来なくて、ほんものの出来  
 る迄待つほかは無い」というところから、中島が文学の純粹性を守りたい気持  
 ちと、その芸術至上主義が読み取れる。戦争謳歌の作品しか認められないその  
 時代、中島敦は作家になり、ものを書きたいという強い願望を持っていたので  
 ある。

### 3 中島敦の作家願望

中島敦がメモに書きとめた「断片九」には次の一節がある。

ない失業者、つまり文学〔をやりたい〕なぞと不量見を起してゐる男で  
 ある。(略) 彼は町を歩いてゐた。このころ彼は次第に自分の才能に対す  
 る詩人をなくして行つた〔ゐた〕。(略) 次のやうな文句ができ上つてきた。  
 それは詩ではなかつた。彼は、(小説をかきたいと思つてゐたけれど) 詩  
 なんぞ、かいたことがなかつた。(略)

才能のない私は  
 才能のないことを悲しみながら、  
 港町の  
 夜の盛り場を歩いてゐた。

一体、私に何か、できることがあるのであろうか？

一体、私は何かになれるのであろうか？

(略)

私はもう廿五だ。私は何かにならねばならぬ。

ところで、一体私に何ができる。

(略) (〔 〕は挿入、[ ]は併記)

「断片九」の創作期間は不明であるが、その中にはっきりと「私はもう廿五だ」と書いているので、中島敦の25歳ごろに書き下ろしたものと推測できる。年譜によると、中島が25歳(1934)の時、3月、大学院を中退。4月末、『中央公論』の新人募集の懸賞小説に「虎狩」を応募、7月に選外佳作となったという。中島は「(小説をかきたいと思つてゐたけれど)詩なんぞ、かいたことがなかつた」が、この挫折もあった関係で、近頃「次第に自分の才能に対する詩人をなくして行つた」というふうを考え、さらに、「才能のない」自分が「できることがあるのであろうか？」と、小説と詩を書きたいという強い気持ちがあるが、書けないではないかと憂鬱になる心境が読み取れる。

1933年ごろから書き継がれていた未定稿作品「北方行」においては、作者の分身の一人といえる黒木三造は「自分は作家となるやうに生れついてゐる。誰が何といはうと、それは定まつてゐるのだ」と宿命的に考えている。

「光と風と夢」(『文学界』1942年5月号)はサモアという南海の小島における晩年のイギリス作家スティヴンスンの生活を素材にし日記風の作品であり、1942年上半期の芥川賞候補となった。作家スティヴンスンは自分が今まで歩いてきた人生について次のように考えている。

満十五歳以後、書くことが彼の生活の中心であつた。自分は作家となるべく生れついてゐる、といふ信念は、何時、又、何処から生じたものか、自分でも解らなかつたが、兎に角十五六歳頃になると、既に、それ以外の職業に従つてゐる将来の自分を想像して見る事が不可能な迄になつてゐた。

病気が行為への希求を絶つて以来、人生とは、私にとつて、文学でしかなくなつた。文学を創ること。(略)私は蚕であつた。蚕が、自らの幸、不幸に拘はらず、繭を結ばずにゐられないやうに、私は、言葉の糸を以て物語の繭を結んだだけのことだ。



俺は、物語を書くことしか今まで考へたことが無かつた。

など、作家になりたいという強い意志をはっきりと読み取れる。これは実際に作者自分の信念をスティヴンスンに託す中島の願いと考えてもよい。

また、中島敦自身の心境そのものを描いているといわれる「山月記」がある。中島は自分の作品についてタカ夫人に一度も話したこともないのに、南洋から帰った後のある日、夫人に「人間が虎になった小説を書いたよ」と教えた。タカ夫人は「その時の顔は何かせつなさうで今でも忘れることが出来ません」と、後で「山月記」を読んだら、「まるで中島の声が聞える様、悲しく思ひました」<sup>(13)</sup>と回想している。最近、川村湊氏にも「山月記」は「私小説」<sup>(14)</sup>と指摘されているように、中島は主人公李徴に自分の苦悶と焦燥を託しているといえよう。

「狷介」で「賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた」主人公李徴は、「下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に残さうとした」のである。しかし、詩家に成りそこない、虎に変身してしまった李徴は、ある日自分がいる山を通り過ぎる友人袁彦に自分の詩家になりたい夢を語っている。

自分は元来詩人として名を成す積りでゐた。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のものを、一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れないのだ。

ところが、虎になった李徴はこの宿願をどうしても果たそうとする強い気持ちを持ちながら、次第に人間の心が消えつつ、虎に近づいていくこと、つまり思考・作詩が不可能になることに対して恐怖と焦燥も深く感じている。また、人間の心を失い、次第に虎に近づいて行くことを心配すると同時に、「空費された過去は？己は堪らなくなる」という後悔の念がうかがわれる。中島は主人公李徴を借りて、自分の作家への夢を語っていることが分かる。

南洋に滞在した時、中島はものを書きたくても、体調不良、厳しい自然環境と仕事の都合で、何も書かずに、時間を無駄にすることを悔しく思っていた気持ちは、虎に変身した李徴に通じている。南洋書簡から、生活のために、自分

の志すことに専念できないことを口惜しく思う気持ちが読み取れる。たとえば、1941年11月9日付けの夫人タカ宛ての書簡には、次のように書いている。

南洋に長くゐる人は、たしかに頭の働きの鈍いね。これは本当だ。でも十月の終になつても、一枚も書けなかつた時は、さすがになさけなかつたなあ！ 自分の不甲斐なさに、口惜し涙が出たよ。だが、この涙は、誰にも分つてもらへない。名前のほかは。又、誰にも話すべきことでもあるまい。桓や格も、大きくなつて、(普通の役人や会社員で終る人間なら、それは、それでいいが)もし、学問や芸術に志ざす人間だつたら、たとへ餓死しようとも、自分の志ざす道から外れて、よその道に入るやうなことは、させ度くないなあ。オレの今、味はつてるやうななさけない思ひはさせたくない、しみじみ考へるよ。

中島敦が志すのは役人ではなく、学問と芸術である。したがって、今南洋庁で自分の志向と合わない仕事を書くことを害することに対して極めて悔しく思っている。自分はこの辛さを十分味わっているため、もし子供が学問と芸術に志すなら、餓死さえしなければ、絶対志す道からずれたよその道に入らせたくないのである。

中島が南洋庁に赴任したのは、彼自身によると、南洋の温暖な気候が持病の喘息によいからであるが、夫人のタカによると、「お金のため」<sup>(15)</sup>であり、義母の借金をすべて返済したという。実は、中島一家の家計はとても厳しいものであった。タカ夫人の回想によると、横浜本郷町に一家一緒に暮らす時代は一番幸せな一時であったが、「それでも月給の三分の一ほどが薬代になり、道を歩いている時、本当にお金が落ちていないかと下を見ながら歩いたこともあります」<sup>(16)</sup>という。

中島敦が南洋庁から帰る1ヶ月前に、『文学界』1942年2月号に『古譚』を総題にして、「山月記」と「文字禍」が掲載された。好評であったため、つづいて5月号に芥川賞の候補に推薦された「光と風と夢」が載った。同月、筑摩書房と創作集『光と風と夢』の出版を約した。数日後、『中央公論』への執筆も契約した。7月、今日の問題社と第2作品集『南島譚』の出版契約を結んだ。

文名があがった中島はついに作家として生活していくことを決意し、同月南洋庁に辞表を出した。同月8日付け小宮山静宛の書簡においては、「僕の最初の本が今月中に出る筈。これからは、カキモノをして生活して行くこととなります」と書いている。これから役人をやめて、本を書いて生活する意気込み、自信と喜びが窺える。

しかし、ほぼ5ヶ月後の1942年12月4日に、中島は死の床で「書きたい、書きたい」、「俺の頭の中のを、みんな吐き出してしまいたい」<sup>(17)</sup>と夫人に涙をためて語ったという。

敦の死後2年、父田人の手によって作成された「中島敦年譜」の最後のところに、次のように記されている。

派されて東京に赴くの時、南洋庁の職務を辞去し、身を立てて作家と為らんことを決意し、家中の種々の漢籍を涉獵し、史記・漢書を研究し、苦心読研し、中より較やかに佳き材料を獲得せんことを冀ふ。「李陵」の脱稿後、韓非子を以て題材を為すの著作を似擬し、世を逝るの前に正に着筆して「吃公子」を作らんとす。雌伏十年、此の精神振作せば、大いに作為すること有らんとするの人、竟に不幸是の年の十二月四日、一病起たず。嗚呼！

父中島田人

涙を揮いて誌す

長い雌伏期を経て、ようやく世間に認められ、羽ばたいて作品を次から次へと書こうとする時期になった中島敦は、33歳の若さで世を去った。「戦争といふ環境のなかで、大部分の小説が文学であることを抛棄」<sup>(18)</sup>してしまった時、戦争賛美のようなものを書けば、すぐに文名をあげることができた。ところが、家計が苦しい中、ずっと前から作家願望を持っていた中島敦は、生活に屈せず、最後に、長年の願いがごく短い期間しか叶えなかった。そのようなものを「書きたい、書きたい」という強い意気込みを持ちながら、「ほんもの」ができるまで待つことは、中島の芸術至上主義を裏付けるものではないのか。

#### 4 非順応・非功利的な姿勢

「章魚木の下で」において、次の一段がある。

文学者の戦場は飽くまで書齋にあると唱へる人が多い。現在も尚旺盛な創作熱にとり憑かれてゐる人や、大いに自己の文学を以て御奉公し得る自信のある作家なら、十分にそれを主張する資格がある。併し、全然書けなくなつたり、自己の作品に不安を感じたりするやうな人迄が、今迄文学をやつて来たからといふそれだけの事実を引きずられて、無理に書齋に嘯りついてゐることは無い。人手の足りない此の際、宜しく筆を捨てて何等かの実際的な仕事に就いた方が、文学の為にも国家の為にもならうと思ふのである。

作家といふ名前を返上して、戦時下の国民の一人として戦争遂行に必要な実務にたづさはればいいのではないか。

文学者は戦争に何か役立つことをしたければ、自分の文学を以て奉公しないで、「作家といふ名前を返上して、戦時下の国民の一人として戦争遂行に必要な実務にたづさはればいい」と考えている。ここから中島の文学の純粋さを守りたい気持ちが窺える。

中島は、文学が戦争に役立てるものとは思わない。それに、木村一信氏が指摘した通り、「阿諛迎合的な態度、もしくはそれに近い姿勢でもって、社会に立ちゆく方便として文学に携わっている人々に批判の眼を向けていた」<sup>(19)</sup>のである。中島ははっきりと戦争に反対とは言っていないが、文学者が国家のために何かしたければ、「筆を捨てて何等かの実際的な仕事に就いた方がいい」というアイロニー交じりの見方を表明している。つまり、方便で文学を利用し、非「ほんもの」的なものを書き、芸術としての文学を汚す行為だけは許せない。この文学の純粋性に固執する冷静な態度は、彼の政治への非順応的な姿勢によるといえる。

中島は南洋庁に勤めている間、エッセイ「章魚木」（『南洋群島』1942年3月号）を発表した。次のような章魚木を描いている一節を引用する。

その赤い小山にも、海への傾斜にも、到る所ただこの木、たこの木、たこの木であつた。(略) 或るものは傲然と屹然して亡び行く民族の最後の酋長の如き気概を示し、他のものは飄然と世を逃れ道を楽しむ者の如き風格を見せる。吼えるもの。嘯くもの。晒ふもの。嘲るもの。沈鬱なるもの。忿然たるもの。憤然たるもの。一本々々が悉く他と異なった表情をして、空と海と風との空間に立つてゐる。(略) 凡そ没個人的な椰子の樹にひきかへて、このたこの木というふ奴はどれを見ても全く一本一本に個性が躍動してゐるやうだ。(傍線、引用者。以下同)

ここから、個性のあるものと不順応に対する中島の賛美が読み取れる。これに対して、次の一節もある。

数日後、アイミリーキから瑞穂村への道で私は又たこの木の群を見た。これは幹もなくすくすくと伸び葉も折れず裂けず、極めて大人らしい個性の無いたこの木共であった。アルコロンなたこの木は突然一喝をも喰はせかねない勢いだったが、此処のたこの木達は、声を揃へて大人らしくコンニチハと頭を下げさうな、良くしつけられた優等生ばかりである。飼慣らされた檻の中の猛獣を見る時のやうな味氣無さを私は感じた。

ここから、個性のないことと順応の態度に対する批判が見出される。

また、中島が南洋庁に赴任していた間、家族や友人宛の多くの書簡から、南洋植民地政策と教育政策への軽蔑と批判が窺える。

たとえば、1941年12月10日付長男桓宛の葉書には、サイパンの風景の写真について、「まん中のどうぞうなんかどうでもいいです」と書いている。この真ん中の銅像は「シュガーキング・パーク (砂糖王公園)」に建っている松江春次の全身像である。1921年に松江は南洋興発を創立した。南洋興発は日本の委任統治時代における製糖産業を中核としたミクロネシア最大の企業であり、「海の満鉄」といわれたものである。松江の事業はめざましい成長を遂げ、1935年までにテナンおよびロタにも製糖・酒精工場が建設され、南洋最大の企業へと発展した。「砂糖王」と呼ばれた松江は、南洋群島の植民地支配を

代表する人物だった。行政的には南洋庁長官がトップだったが、松江春次は、そうした官僚以上の政治的、経済的実力を持っていた人物である<sup>(20)</sup>。「なんかどうでもいいのです」という言葉遣いには、松江春次と植民地支配への嫌悪と反撥が込められていると考えられる。

1941年11月6日付、父田人宛の書簡には、「ただ、教科書編纂者としての収穫が頗る乏しかつたことは、残念に思つてをります。現下の時局では、土民教育など、殆ど問題にされてをらず、土民は労働者として、使ひつぶして差支へなしといふのが為政者の方針らしく見えます、之で、今迄多少は持つてゐた、此の仕事への熱意も、すっかり失せ果てました」と書いているように、明らかに教科書編纂と島民の教育政策の不满を洩らしている。

更に、同年11月9日付、夫人タカ宛の書簡に書いている「土人の教科書編纂といふ仕事の、無意味さがはつきり判つて来た。(略)土人達を幸福にしてやるといふことは、今の時勢では、出来ないことなのだ。(略)すっかり、編纂の仕事に熱が持てなくなつて了つた」という内容から、また同年12月2日付たか夫人宛の書簡「この公学校の教育は、ずゑぶん、ハゲシイ(といふよりヒドイ)教育だ。まるで人間の子をあつかつてゐるとは思へない」という考えからも、南洋における植民地政策推進の功臣への軽蔑、当地の植民地教育政策への批判と土人への同情がはっきりと読みとれる。川村湊氏が言うように、「少なからぬ日本の文学者、学者が南洋群島を視察、見学に行っているが、中島敦ほど「土人」に同情的であり、その子どもに対する皇民化教育に批判的だった人は少なかった」<sup>(21)</sup>のである。

また、中島の南洋書簡から政府支配者としての役人への嫌悪と時勢への批判も窺える。

たとえば、1941年6月4日付、親友氷上英廣宛の葉書に書いている「今度ね、南洋(パラオ)へ行くことになつた、喘息にも、いいだらうと思ふし、少し遊んで来たくもあり、——ただ、役人になるのは、少しいやだが、何とか勤まらないこともないだらうと思つてね」という内容と、同年9月13日付、父田人宛の書簡に書いている「実に、イヤでイヤで堪らぬ官吏生活(蠟を嚙むどころではございませぬ。こんなあぢきない(丸点、原文)生活は初めてです)(略)このやうな時世では、チツポケな個人の理想など、もつと大きな世

界の変動のために何時みじめにひつくり返されるか判らないからです」という内容は、中島の南洋庁での「官吏生活」への嫌悪を表わしている。

また、同年10月1日付のタカ夫人宛の書簡においては、中島は、ある日、仲良くなった「上役と衝突ばかりしてそのため出世できない」役人の一人竹内さんと一緒に、「役人といふもの（殊に南洋庁の役人）を痛快な程、罵倒した」と書いている。

上に見るように、中島は政府の政策と方針をすべて順応に受け入れるのではなく、南洋庁における役人と植民地政策・教育政策に批判の眼を向けていた。

ほかに、生徒の答案用紙反古（3年1学期国語）を裏返しにして袋綴じしたものに鉛筆とペンの半々で書かれている「断片二十二」も残っている。創作時代が不明であるが、生徒の答案用紙の裏に記入しているため、1933年4月から1941年6月まで、横浜高等女学校教諭となっていた間のもものと推定される。

何といふ変化、政治的変遷、思想的変動の多い時代であつたか！昨日の支配者は今日の〔被〕追放者、昨日の栄華も今日は胡塵蹄に蹂躪されてゐる。この目まぐるしい無常の世界の中にあつて、彼等は決して（東洋の隠者達の如く）山林へのがれることを考へなかつた。時代の変化が烈しければ烈しい程、彼等の生活力は益々豊かに、生の無常を目にすることが多ければ多しだけ、彼等の生に対する愛は強いられた。それは丁度、潮流の速い瀬戸に住む魚類程、その肉が固く鍛へられるやうなもの工合であつた。

（■は抹消、〔 〕は挿入、[ ]は併記）

今の戦争時代において、「政治的変遷」と「思想的変動」が多いため、個人の「生の無常」を一層感じるのである。しかし、時代逃避の態度を取らずに、時流と戦っているうちに、人間はますます強くなると中島は考えていたようである。

また、初期習作の段階から、中島はすでに政府の政策への疑問と批判を持っていた。

「巡査の居る風景」（「校友会雑誌」322号、1929年6月）は当時日本が支配

下にあった朝鮮半島の凄まじい庶民の生活と、ある朝鮮人の巡査の心内の民族意識による矛盾を描いた作品であり、植民地政策に批判的な眼を向けた習作である。

「蕨・竹・老人」は「巡査の居る風景」と一緒に『短篇二つ』と題して「校友会雑誌」322号（1929年6月）に発表した作品である。「毒消し」と中島に呼ばれた「蕨・竹・老人」においても、作者の当時の日本政府政策——軍国主義への反感と無関心が記してある。

喇叭の音が依然として、まだ、あののどかな単調をいつまでも山の向かふからかすかに響かせて居るのです。

これは又、何と馬鹿馬鹿しいことに、私は何時の間にかその歌を小さな声で、口の中に繰りかへして居たのです。此の馬鹿げた無意味な軍国主義的の唱歌を……

「巡査の居る風景」と「蕨・竹・老人」は二作をまとめて『短篇二つ』と題して発表した所以については、中島は自分で、「蕨・竹・老人」は「毒消し」だと説明している。当時文芸部委員を担当した氷上英廣氏は、「（「巡査の居る風景」が）時代批判的な意味を持っている。それだけ出すと、いかにも左翼のように思われるから。ぼくらのときはそういう感じの時代でした。そういう精神的なものが押さえられたんじゃないですか」<sup>(22)</sup>と解釈している。また、勝又浩氏によると、「『短篇二つ』の総題が採られたのは、この場合、「巡査の居る風景」の標題が目立つことを避ける配慮があったと見るべきかもしれない」<sup>(23)</sup>のである。

以上のように、南洋庁に滞在した時期のエッセイ「章魚木」、家族・親友への書簡、及び初期習作等によると、中島は政府の政策に対し、一概に無批判に、順応的に受け入れなかったことが分かる。これは、彼の非功利的な姿勢に通じているといえる。

友人釘本久春氏の回想によると、「中島は、いうまでもなく俗物が大嫌いであつた。また、立身出世欲は、こと文学者、芸術家に関しても、彼の最も軽蔑していたところである。トンは、通俗的であることから、常に遠かった」<sup>(24)</sup>という。



また、朝鮮の龍山小学校から同学年で、京城中学校では同級生だった山崎良幸氏の回想文<sup>(25)</sup>においては、次のことが書かれている。

中島君は中学四年から一高に入り、東京に去りました。(略)彼が東京へ行って私が出した手紙の二、三回目だったでしょうか、彼の前途を祝い、大臣が大政治家になるのを期待しているといったようなことを書いたところ、彼から折り返し、そのようなものは偉いとは思わず、またなろうとも思っていない旨の長い手紙が来ました。

ここから、世間の俗的、功利的なものを軽視する中島の性質がよくわかる。

ところが、日本政府の政策を批判的、非順応的な態度を取り、非功利的な姿勢を示している中島敦は、一国民として戦争について関心を持っていたようである。

## 5 中島敦の戦争についての関心

田鍋幸信氏が編集した『写真資料 中島敦』<sup>(26)</sup>においては、中島の自筆画が収められている。軍服で、両手で長い刀を高く持ち上げる兵士が薄い色鉛筆で描かれている。右下に、わりに大きめの字で「中島敦」と書かれている。解説によると、「中島敦」の字が確認されて最初のものだという。すなわち、これは幼年時代の画と確認できる。(図1を参照)

中島が小学校に入学したのは1916年、7歳のことで、1922年に13歳で朝鮮京城府公立京城中学校に入学した。したがって、この自画像は1910年代のもの



図1 自画像

だと推測できる。そのころ、少年中島は同時代の子どもと同じように軍隊に関心を持っていた。

ほかに、南洋に滞在時の日記には、戦況に関心を示す箇所がある。たとえば、1941年12月11日付けの長男桓宛ての葉書には、次のように書いている。

桓！

日本の海軍は強いねえ。

海軍の飛行機はすごいねえ。

また、同月14日のタカ夫人宛ての書簡には次のように書いている。

いよいよ来るべきものが来たね。どうだい、日本の海軍機のすばらしさは。

1941年12月11日の葉書と14日の書簡なので、真珠港の襲撃事件の際のことについて書いていると推測できる。どちらからも「日本の海軍」の強さ、すばらしさとすごさに感嘆し、喜んでいる気持ちを読み取ることができる。

神奈川近代文学館の中島敦文庫所蔵の「落書帳の二」には、「甲巡」「乙巡」「駆逐艦」などの名称、型、隻数についての記入があり、戦闘機の絵が多数ある。そのなかに、落書帳の三丁裏から四丁表にかけて、青黒インクの万年筆で書いたメモがある。三丁裏には「敵に与へたる損害」という題の下に、米国と英国の戦艦、航空母艦、水上機母艦、甲巡、乙巡、駆逐艦、潜水艦、砲艦と掃海艦という順で、それぞれの撃沈・破損数を詳しく記しており、四丁表には「我が損害」という題の下に、航空母艦、水上機母艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦、掃海艦と戦艦という順で、それぞれの沈没・破損数が記してある。

また、田鍋氏は前述した『写真資料 中島敦』においても、戦時中、中島は「彼我軍艦表」を作り、毎日の報道に彼我の軍艦の表などを作っていたと指摘している。要するに、中島は戦争にかなり関心を示していたと考えられる。

## 終わりに

政府に対して非順応的な態度を取っていた中島敦は、明確に戦争に反対すると明言したことはないが、非功利主義を貫き、「政治」と「文学」をはっきり区別し、「自己の作物に時局性の薄いことを憂へて取つて付けた様な国策的色彩を施す」ことを明確に批判している。更に、家計の苦しいなか、作家になりたいという強い願望を持っていた彼は、「文学を高い所に置いて」、「自分が何か実際の役に立ちたい願ひ」と、「文学をポスター的の実用に供したくない気持」とが「頑固に素朴に対立してゐた」からこそ、戦時下、独自の文学の純粹さを守っていたといえる。初期の「狼疾記」、「かめれおん日記」のような過剰な自意識にこだわった自伝的小説から、後期の「山月記」、「弟子」、「李陵」のような典籍に基づいた作品まで、中島はひたすら人間の存在と運命のような、形而上学的、文学の永遠的な課題を考え続けていたのである。

したがって、単に中島敦は戦時下、「芸術的抵抗」の姿勢を取っていたという言い方はやや曖昧で、彼の「文学」と「戦争」に関する認識を具体的に指摘したほうが分かりやすいようである。むしろ、中島敦は戦時下において、文学が実用的に、政治に供されることに対しては批判し、芸術・文学の純粹さを守るという芸術至上主義を貫いていた、という言い方が妥当ではないと思われる。

## 註

- (1) 『時代別日本文学史事典 現代編』東京堂、1997年。
- (2) 平野謙『昭和文学覚え書』三一書房、1970年。
- (3) 鷺只雄「芸術的な抵抗」、『講座昭和文学史3 抑圧と解放』有精堂、1998年。
- (4) 小田切秀雄『現代文学史・下巻』（集英社、1975年）においては、「新しい作家のうちにも、石川淳・坂口安吾・中島敦・北原武夫・田中英光・壺井栄のような、それぞれにつよい個性をもち、文学的な鋭い抵抗のなかで自己のきわめて独自の作品世界を展開した一群の人びとがあった。（略）中島敦は右のような文体（漢文読み下しの文体を指す、引用者注）をとることによって時流の圧力に規制されぬ批評性と自由な表現力を発揮した」と論じている。
- (5) 三好行雄編『近代文学必携』（「国文学 別冊30号」、1987年）において、渡辺芳紀は「こうした動き（戦争一色化を指す、引用者注）の中で消極的ながらも文学的抵抗のあらわれもなかったとはいえない。（略）そのほか、独自の世界を守った堀辰雄や、新人の中島敦などが、ささやかながら抵抗の姿勢をしめたのであ

- る」と指摘している。
- (6) 佐古純一郎「戦争下の文学」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、1958年。
  - (7) 三好行雄、竹盛天雄編『近代文学6—昭和文学の実質』有斐閣、1977年。
  - (8) 吉田精一『近代日本文学概説』秀雄出版、1970年。
  - (9) 注(7)に同じ。
  - (10) 「文学史的定位の基点——『章魚木の下で』を視座として——」、木村一信『中島敦論』(双文社、1985年)に所収。
  - (11) 『日本近代文学大事典』(講談社、1977年)第5巻によると、『新創作』は芸芸雑誌で、1939年7月号～1943年11・12月合併号まで、全36冊ある。発行者は佐々木翠(船山馨夫人)である。創作社発行。最初の誌名は『創作』。第7号より『新創作』となる。非『文学界』、非『日本浪漫派』の姿勢を貫き、時局への便乗の少なかった戦時下の芸芸雑誌として評価するに足るという。
  - (12) 『日本史大辞典 第5巻』(平凡社、1993年)によると、南洋庁は南洋群島を管轄した日本の植民地行政官庁である。第1次大戦でドイツに宣戦した日本は、1914年10月ドイツ領太平洋諸島を占領し、同年12月臨時南洋群島防備部隊を置いて軍政を開始した。大戦後の1920年、同地域が日本の委任統治領となったのを受け、1922年3月南洋庁官制(勅令)を公布、同年4月パラオ諸島のコロロール島に本庁を設置し、民政へ移行した。第2次大戦末期にはアメリカ軍の反攻で行政機能を喪失し、敗戦で自然消滅した。
  - (13) 中島タカ「お礼にかへて」、『中島敦研究』(筑摩書房、1978年)に所収。
  - (14) 川村湊「帝国に抗する力を表現した作家」、『中島敦』(河出書房新社、2009年)に所収。
  - (15) 中島タカ「思い出すことなど」、『中島敦全集・別巻』(筑摩書房、2002年)に所収。
  - (16) 注(15)に同じ。
  - (17) 注(15)に同じ。
  - (18) 荒正人氏が始めて中島敦の名を知ったのは1942年5月号の『文学界』に出た「光と風と夢」で、「戦争といふ環境のなかで、大部分の小説が文学であることを抛棄してゐたときなので、それは際立つて香気つよい印象を残した」という回想がある。荒正人「中島敦氏のこと」、「中島敦全集通信、第1号」、『中島敦研究』(筑摩書房、1978年)に所収。
  - (19) 注(10)に同じ。
  - (20) 川村湊『中島敦 父から子への南洋だより』(集英社、2002年)および『日本史大辞典 第五巻』(平凡社、1993年)を参考。
  - (21) 川村湊編『中島敦 父から子への南洋だより』集英社、2002年。
  - (22) 『中島敦全集2・解説』筑摩書房、1976年。
  - (23) 『中島敦全集2・解題・校異』筑摩書房、2002年。
  - (24) 釘本久春「敦のこと」、『中島敦全集・別巻』(筑摩書房、2002年)に所収。
  - (25) 田鍋幸信編著『中島敦・光と影』新有堂、1989年
  - (26) 田鍋幸信『写真資料 中島敦』創林社、1981年

※本文および書簡の引用は『中島敦全集』(筑摩書房、2001～2002年)によった。ただし、旧字は全て新字に改めた。

<ABSTRACT>

## **“Art for Art’s Sake” of Nakajima Atsushi**

YU Yan

Nakajima Atsushi was a writer under the Japan-China war, but he did not write any works about the war. This meant that Nakajima Atsushi took an attitude which was named “Artistic Resistance”. However, this is an ambiguous expression. It is necessary to analyze his recognition of “Literature” and “War”. This article seeks his outlook on literature through an analysis of his novels, essays, letters and diary. Nakajima Atsushi was not against the war, but he distinguished between “Politics” and “Literature”, and did not want literature to be a picture of war. He criticized the practical use of literature by politics. Therefore, we can conclude that Nakajima Atsushi insisted upon the supremacy of “Art” for the sake of maintaining the purity of literature during the Japan-China war.